

半導体用圧力伝送器

取扱説明書

型番 DHT -□-□-□-□-□-□-□

このたびは、半導体用圧力伝送器をお買い上げいただきありがとうございます。
正しくご使用いただくためにこの取扱説明書をよくお読みください。
また、製品は日々改良されておりますので、現品に付属された取扱説明書で
操作を行ってください。なお、本取扱説明書は大切に保管してください。

1. 使用上の注意
2. ゼロ調整ボリュームの使用方法
3. 電源電圧と負荷抵抗について



日本工業規格表示許可工場

株式会社 **第一計器製作所**

<http://www.daiichikeiki.co.jp>

- 本社 工場 ▪ 〒660-0823 尼崎市大物町1丁目7番-2号
TEL. 06(6481)5551(代) FAX. 06(6401)4646
- 東京営業所 ▪ 〒140-0013 東京都品川区南大井6-7-9
大森FNビル1階
TEL. 03(3768)6761(代) FAX. 03(3768)6663

1. 圧力伝送器の取付について

圧力伝送器の取付について

圧力伝送器の締め付けトルクは接続部ねじ及び継手の推奨締め付けトルクで締め付け、無負荷時の出力が変化しない程度に締め付けてください。

過大トルクで締め付けると精度を保証できません。また、圧力伝送器の点検として、3～6ヶ月に1度はゼロの確認および、調整を行うことをおすすめします。

サージ圧について

サージ圧が圧力伝送器の耐圧を越えると予想される場合は、サージ圧対策を行うか、圧力伝送器の圧力レンジを変更するかの処置を行ってください。

ノイズについて

測定値が時々変動したり、異なる値を示すなど数値が一定しない場合は、

ノイズ影響があると思われますので、ノイズの発生源を調べ、

断ち切る必要があります。ノイズが乗っている電流とは別の電源を利用したり、ノイズフィルターを入れる方法が有効的です。

また、外部からの誘導ノイズにより、伝送器・ケーブルの信号に乗ってくることもありますので、伝送器・ケーブルはノイズ源から遠ざける必要があります。

また、本ケーブルと動力線を束ねたり、同じコンジット管に入れしないでください。

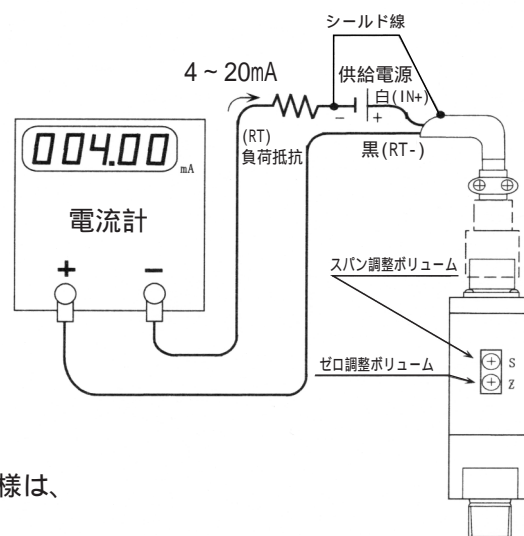
型番・仕様・外形図等はカタログ、または<http://www.daiichikeiki.co.jp>をご覧ください。

2. ゼロ調整について

ゼロ調整は以下の項目を守ってください。

1. 電源投入後、3分以上(15～20分)のエージングを行った後に実施してください。
2. 圧力導入口に圧力が掛かっていない状態(大気開放)で右図に示すように電流計を接続し、その値が 4.00mA になるようにゼロ調整ボリュームを調整します。

注意: スパン調整ボリュームは、圧力基準器をお持ちでないお客様は、絶対に触らないでください。



3. 電源電圧と負荷抵抗について

- 本製品は、電源電圧の値により負荷抵抗範囲が変わります。

下記の計算式の範囲内でご使用になれます。

$$RL (\text{負荷抵抗}) < 50 \times V_{in} (\text{電源電圧}) - 400$$

- 出荷時の校正条件は、

24V仕様の時は500Ωです。

また12V仕様の時は150Ωで行っています。

